双葉郡の今を発信

特別講師の池上彰さん（前列左から５人目）を囲むジャーナリストスクール参加者とＯＢ・ＯＧ

ジャーナリストスクール

令和７年８月７・10・11・16日

東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）
郡山市青少年会館
郡山市市民交流プラザ（ビッグアイ）

小中高生が新聞作り

復興の取り組み取材

福島県内の児童生徒が、東日本大震災と東京電力福島第１原発事故から14年が過ぎた県内を取材し新聞を作る「ジャーナリストスクール」は２０２５（令和７）年８月７、10、11、16の４日間、双葉郡と郡山市で開かれた。小学５年生から高校２年生までの39人が、郡内で復興に取り組む団体や施設を取材した。記事、レイアウト、見出しを考え、各地の歩みや将来を伝える新聞を完成させた。

７日は、双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で開会式を行った。続いて児童生徒は、一般社団法人ふたばプロジェクト（双葉町）、中間貯蔵事業情報センター（大熊町）、ＪＡＥＡ ＡＮＡＬＹＳｉＳ ＬＡＢ.（同）、福島水素エネルギー研究フィールド（浪江町）、とみおかアーカイブミュージアム（富岡町）、とみおかワイナリー（同）を訪れた。施設内を見学し、メモや写真をとりながら担当者に積極的に質問した。

10、11の両日は、郡山市青少年会館で班ごとに原稿を執筆した。高校生の班長の下で話し合い、レイアウトや見出しもまとめた。学校新聞を長年指導している実行委員長の武内義明さん（相馬高講師）、福島民報社と福島民友新聞社の記者、過去のジャーナリストスクール参加者が助言した。

16日は、郡山市のビッグアイ７階の市民交流プラザで発表会に臨んだ。子どもたちは、取材で学んだ成果や新聞を、特別講師のジャーナリスト池上彰さんらに披露した。「事前に考えていた施設のイメージと実際とが違っていて驚いた」「取材した情報のうち、どの部分を新聞に入れるか苦労した」などと振り返った。司会はＯＧの鈴木麻友さんが務めた。

ジャーナリストスクールは13回目。「震災・原発災の経験・教訓、復興状況伝承事業」として県、ふくしまの学び実行委員会が主催した。郡山市教委の共催、県教委、県小学校長会、県中学校長会、県ＰＴＡ連合会の後援、福島民報社と福島民友新聞社の特別協力。

「県外、海外に広く伝えて」

子どもたちの質問に答えジャーナリストの心構えを説く池上彰さん

池上彰さん特別講師

特別講師の池上彰さんは最終日の発表会で、六つの班ごとに作った新聞や発表について講評した。発表会に先立ち交流会もあり、参加者と一緒に昼食を取りながら懇談した。

個別講評では、取材した子どもたちに記事の表現や意味について質問。「口頭で話した部分を新聞に盛り込んではどうか」「自分で分かっていても、読者には分からないことがある。基本的な部分でも記事に書く必要がある」などと助言した。

全体講評では「新聞の出来はもちろん、取材の体験や感想を踏まえた発表も聞き応えがあった」とたたえた。今回の体験を基に「新たな気付きを大事にしよう」「今のふくしまを県外、海外に広く伝えて」などと期待を込めた。

ＮＨＫ記者を経て75歳になった今もジャーナリストとして活動する自身の経験を紹介。「勉強、生活、治安など、日本の子どもたちは世界の中でも恵まれている」「私たちにとって当たり前のことでも、海外では当たり前ではない。世界の広さを知ってほしい」と話した。

本事業は福島県東日本大震災こども支援基金と被災者支援総合交付金を活用しています